

森林環境に対する住民意識 (Ⅲ)

——森林体験と森林意識——

菅原 聰・竹内久代

信州大学農学部 森林経営学研究室

I 研究の目的

森林環境に対する住民意識についてのアンケート調査を、長野県下の13市町村に対しておこない、その結果を解析して、

イ) 地域住民の森林意識には、すべての地域の地域住民によって抱かれている「共通的な森林意識」と地域によって差異のみられる「地域的な森林意識」があることを第I報¹⁾で、

ロ) 「地域的な森林意識」の形成にあたって、「森林率」・「森林密度」や「人口密度」などの森林環境要因が大きく関与していること、ならびに、地域住民の森林意識を「具体的・伝統的な森林意識」と「情感的・感性的な森林意識」に分けた方がよいことを第II報²⁾で、

明らかにしてきた。

身近かに森林が広く存在しており、人口密度が低いところに住んでいる人達が、“日常生活と密着した具体的・伝統的な森林意識”をもっていることが多いのに対し、森林が身近かなところからなくなってしまう、人口密度が高くなっているところに住んでいる人達は、“森林に対する憧れからの情感的・感性的な森林意識”を強くもつようになっている。森林意識は各人それぞれのものであるが、森林意識の形成において、それぞれの個人をとりまいている森林環境が大きな影響をおよぼしている。

森林が身近かなところからなくなっている地域に住んでいる人達のうち、週末などを利用して森林へ出かけている人も多くなっている。その反面、森林が身近かなところに広く存在している地域に住んでいる人達のうちには、森林へまったく出かけずに、都市へと顔を向けている人も多くなっている。このように、各人をとりまく森林環境がまったく同じであっても、森林との接し方が異なってきている。森林に直接に接すること、すなわち、「森林体験」も「森林環境」とともに森林意識の形成にあたって大きく関与していると考えられる。

本研究では、森林意識の形成要因として各人の「森林体験」をとりあげ、「森林体験」とのつながりで森林意識をとらえることを目的とした。なお、本研究の一部は、文部省「環境科学」特別研究補助金(課題番号59035021)の助成を得ておこなったものである。

II 研究の方法

森林環境に対する住民意識についてのアンケート調査を、長野県の長野市・松本市・諏訪市・伊那市・東部町・軽井沢町・上松町・白馬村・野沢温泉村・川上村・栄村・天竜村・奈川村の13市町村を対象にしておこない、各回答項目についての各調査地でのアンケート回答比率を解析し、各調査地での回答比率のバラツキの大きいものを「地域的な森林意識」と考えることにした。第I報¹⁾で「地域的な森林意識」と判断されたものは、次のような森林意識である。

- イ) “森林はどのような意味で大切だと思うか” という問いに対しての「自然保全」意識・「木材生産」意識
- ロ) 森林休養の形態としての「山菜・きのこ採り」意識・「ハイキング・散策」意識
- ハ) “森林はどのような意味で生活環境をよくしているか” という問いに対しての「土砂流出防止」意識・「やすらぎ」意識
- ニ) 森林と関係あるものとしての「小鳥」意識
- ホ) 森林で心ひかれるものとしての「水の流れ」意識・「木の生長」意識
- ヘ) 今後の森林のあり方についての「木材生産林をふやす」意識・「観光利用を考える」意識

森林意識の数値化のためには、森林意識についてのアンケート調査結果においての各項目の各調査地での回答比率を用い、その値をそれぞれの森林意識値とした。このようにして得られた各調査地の森林意識値は表1と表2のようである。

表1 「地域的な森林意識」の森林意識値(1)

単位：%

調査地	自然保全	木材生産	山菜・きのこ採り	ハイキング・散策	土砂流出防止	やすらぎ
長野市	48.9	28.7	40.4	56.4	77.7	36.2
松本市	60.0	31.3	37.4	57.4	67.8	40.0
諏訪市	59.1	37.4	46.1	55.7	78.3	38.3
伊那市	45.8	39.2	50.0	28.3	65.8	36.7
東部町	48.6	26.1	49.5	55.0	73.0	35.1
軽井沢町	55.7	19.0	55.7	44.3	57.7	31.6
上松町	46.7	45.9	51.6	41.0	69.7	23.8
白馬村	47.6	32.9	54.9	35.4	84.1	36.6
野沢温泉村	44.3	37.4	68.7	26.1	76.5	24.3
川上村	39.3	34.8	70.5	25.0	61.6	17.0
栄村	28.0	38.0	69.0	20.0	73.0	27.0
天竜村	33.0	57.0	60.0	27.0	71.0	20.0
奈川村	40.9	50.0	65.2	15.2	90.0	10.6

次に、これらの地域住民の森林意識に関係すると考えられる「森林体験」要因として、本研究では次のようなものを取りあげ、次のようにして数値化した。

表2 「地域的な森林意識」の森林意識値(2)

単位：%

調査地	小 鳥	水の流れ	木の生長	木材生産林 をふやす	観光利用 を考える
長野市	68.1	28.6	9.5	21.3	10.6
松本市	69.6	30.4	13.9	20.0	10.4
諏訪市	71.3	40.0	20.9	26.1	16.5
伊那市	55.0	36.7	25.0	22.5	14.2
東部町	64.9	36.9	17.1	21.6	12.6
軽井沢町	79.7	21.5	12.7	7.6	31.6
上松町	55.7	51.6	27.0	45.1	27.9
白馬村	65.9	36.6	32.9	14.6	31.7
野沢温泉村	59.1	36.5	18.3	21.7	28.7
川上村	64.3	24.1	17.9	10.7	21.4
栄村	42.0	14.0	21.0	38.0	37.0
天竜村	51.0	34.0	34.0	39.0	17.0
奈川村	56.1	28.8	39.4	48.5	28.8

「森林体験」要因として、「森林体験の量」要因、「森林体験の質」要因と「森林所有」要因をとりあげた。

- イ) 「森林体験の量」要因：“どの程度森林に行っておられますか” という問いに対する回答の「森林へほとんど行かない」・「森林へ年数回行く」・「森林へよく行っている」
- ロ) 「森林体験の質」要因：“森林へは何のためにいきますか” という問いに対する回答の「森林へ仕事で行く」・「森林へ休養に行く」と“森林の手入れをされたことがありますか” という問いに対する回答の「伐採・植林をしたことがある」・「下刈・枝打をしたことがある」・「山仕事をしたことがない」
- ハ) 「森林所有」要因：“森林を所有しておられますか” という問いに対する回答の「個

表3 森林体験要因値(1) —体験の量—

単位：%

調査地	森林へほとん ど行かない	森林へ年数回 行っている	森林へよく 行っている
長野市	25.5	48.9	26.6
松本市	19.1	65.2	15.6
諏訪市	18.3	61.7	17.4
伊那市	32.5	54.2	19.2
東部町	18.0	69.4	11.7
軽井沢町	8.9	50.0	40.5
上松町	13.9	42.6	42.6
白馬村	13.4	43.9	40.3
野沢温泉村	16.5	57.4	24.3
川上村	30.4	47.3	27.8
栄村	15.0	52.0	30.0
天竜村	18.0	51.0	34.0
奈川村	12.1	35.5	45.5

人有林を持っている」・「部落有林などの共同の山を持っている」・「森林を持っていない」]

「森林体験」要因の数値化のためには、森林意識についてのアンケート調査結果においての各項目の各調査地での回答比率を用い、その値をそれぞれの森林体験要因値とした。

そして、森林体験と森林意識とのつながりを明らかにするために、各調査地の森林体験要因値と森林意識値との間の相関係数を算出した。

表4 森林体験要因値(2) 一体験の質— 単位：%

調査地	森林へ仕事で行く	森林へ休養に行く	伐採・植林をしたことがある	下刈・枝打をしたことがある	山仕事をしたことがない
長野市	11.7	73.4	24.5	25.5	60.0
松本市	8.7	74.8	28.7	24.3	52.2
諏訪市	14.8	71.3	33.0	38.3	47.8
伊那市	27.5	50.8	50.0	44.2	31.7
東部町	14.4	70.3	21.6	43.2	47.7
軽井沢町	21.5	64.6	31.6	57.0	27.8
上松町	41.8	51.6	63.9	63.1	16.4
白馬村	47.6	45.1	59.8	61.0	25.6
野沢温泉村	42.6	40.0	33.0	70.4	20.9
川上村	27.7	41.1	51.8	44.6	37.5
栄村	49.0	33.0	46.0	70.0	17.0
天竜村	49.0	35.0	48.0	48.0	30.0
奈川村	77.3	21.2	87.9	75.8	7.6

表5 森林体験要因値(3) 一森林所有一 単位：%

調査地	個人有林を持っている	共同の山を持っている	森林を持っていない
長野市	9.6	6.4	81.9
松本市	7.8	13.0	79.0
諏訪市	14.8	20.0	70.4
伊那市	40.8	39.2	36.7
東部町	17.1	18.9	66.7
軽井沢町	17.7	3.8	75.9
上松町	40.2	16.4	54.9
白馬村	61.0	36.6	34.1
野沢温泉村	47.8	33.0	34.8
川上村	32.1	25.0	52.7
栄村	62.0	33.0	24.0
天竜村	31.0	3.0	61.0
奈川村	75.8	48.5	15.2

III 結果の解析

1 森林体験の量と森林意識

表6 森林体験（体験の量）と森林意識との関係 単位：%

	森林へほとんど行かない	森林へ年数回行く	森林へよく行っている
自然保全	-0.073	0.405	-0.321
木材生産	0.005	-0.409	0.329
山菜・きのこ採り	-0.141	-0.424	0.416
ハイキング・散策	0.012	0.592	-0.498
土砂流出防止	-0.285	-0.287	0.204
やすらぎ	0.149	0.629	-0.583
小鳥	-0.082	0.251	-0.156
水の流れ	0.004	0.069	-0.055
木の生長	-0.257	-0.567	0.551
木材生産林をふやす	-0.280	-0.366	0.353
観光利用を考える	-0.617	-0.554	0.775

森林体験の量と森林意識との関係を知るためにまとめた森林体験要因値（森林体験の量）と森林意識値との相関係数を示しておくのと表6のようである。

表6からは次のことが知られる。

- イ) 「森林へほとんど行かない」森林体験と正相関を示す森林意識はなく、負相関を示す森林意識は、「観光利用を考える」意識である。
- ロ) 「森林へ年数回行っている」森林体験と正相関を示す森林意識は、「ハイキング・散策」意識と「やすらぎ」意識であり、負相関を示す森林意識は、「木の生長」意識と「観光利用を考える」意識である。
- ハ) 「森林へよく行っている」森林体験と正相関を示す森林意識は、「木の生長」意識と「観光利用を考える」意識であり、負相関を示す森林意識は、「やすらぎ」意識である。これらの結果から次のように考えてよいであろう。

まず、「森林にほとんど行かない」森林体験と森林意識との関係は、ほとんど認められない。このことから、「森林にほとんど行かない」人は、森林に対しての関心も低く、明確な森林意識を抱いていないと判断してよいであろう。

次に、「森林へ数回行っている」森林体験が多いところでほど、「森林へよく行っている」森林体験が少ないところでほど、森林休養形態としての「ハイキング・散策」意識や環境保全に対しての期待としての「やすらぎ」意識が高い。それに対して、「森林へ数回行っている」森林体験が少ないところでほど、「森林へよく行っている」森林体験が多いところでほど、森林で心ひかれるものとしての「木の生長」意識が高い。

また、「森林へよく行っている」森林体験が多いところでほど、森林に対して具体的、かつ積極的に関わっていかうとする意欲が認められる。

2 森林体験の質と森林意識

森林体験の質と森林意識との関係を知るためにまとめた森林体験要因値（森林体験の質）と森林意識値との相関係数を示しておくのと表7のようである。

表7からは次のことが知られる。

- イ) 「森林へ仕事で行く」森林体験と正相関を示す森林意識は、「木材生産」意識・「山

表7 森林体験(体験の質)と森林意識との関係

単位: %

	森林へ 仕事で行く	森林へ 休養に行く	伐採・植林をし たことがある	下刈・枝打をし たことがある	山仕事を したことがない
自然保全	-0.659	0.810	-0.430	-0.521	0.539
木材生産	0.685	-0.676	0.650	0.344	-0.493
山菜・きのこ採り	0.690	-0.851	0.463	0.767	-0.720
ハイキング・散策	-0.844	0.970	-0.707	-0.747	0.811
土砂流出防止	0.527	-0.322	0.416	0.314	-0.215
やすらぎ	-0.218	0.818	-0.674	-0.619	0.665
小鳥	-0.574	0.714	-0.459	-0.479	0.551
水の流れ	-0.047	0.199	0.110	-0.060	0.017
木の生長	0.840	-0.732	0.851	0.565	-0.672
木材生産林をふやす	0.647	-0.510	0.581	0.430	-0.515
観光利用を考える	0.664	-0.622	0.489	0.889	-0.833

菜・きのこ採り」意識・「土砂流出防止」意識・「木の生長」意識・「木材生産林をふやす」意識・「観光利用を考える」意識であり、負相関を示す森林意識は、「自然保全」意識・「ハイキング・散策」意識・「小鳥」意識である。

ロ) 「森林へ休養に行く」森林体験と正相関を示す森林意識は、「自然保全」意識・「ハイキング・散策」意識・「やすらぎ」意識・「小鳥」意識であり、負相関を示す森林意識は、「木材生産」意識・「山菜・きのこの採り」意識・「木の生長」意識・「木材生産林をふやす」意識・「観光利用を考える」意識である。

ハ) 「伐採・植林をしたことがある」森林体験と正相関を示す森林意識は、「木材生産」意識・「木の生長」意識・「木材生産林をふやす」意識であり、負相関を示す森林意識は、「ハイキング・散策」意識・「やすらぎ」意識である。

ニ) 「下刈・枝打をしたことがある」森林体験と正相関を示す森林意識は、「山菜・きのこ採り」意識・「木の生長」意識・「観光利用を考える」意識であり、負相関を示す森林意識は、「自然保全」意識・「ハイキング・散策」意識・「やすらぎ」意識である。

ホ) 「山仕事をしたことがない」森林体験と正相関を示す森林意識は、「自然保全」意識・「ハイキング・散策」意識・「やすらぎ」意識・「小鳥」意識であり、負相関を示す森林意識は、「山菜・きのこ採り」意識・「木の生長」意識・「木材生産林をふやす」意識・「観光利用を考える」意識である。

これらの結果から次のように考えてよいであろう。

「森林へ仕事で行く」森林体験や「山仕事をしたことがある」森林体験が多いところでほど、「森林へ休養に行く」森林体験や「山仕事をしたことがない」森林体験が少ないところまでほど、森林に対する期待としての「木材生産」意識、森林休養形態としての「山菜・きのこ採り」意識、環境保全に対する期待としての「土砂流出防止」意識、森林で心ひかれるものとしての「木の生長」意識のような「具体的・伝統的な森林意識」が高い。それに対して「森林へ仕事で行く」森林体験や「山仕事をしたことがある」森林体験が少ないところまでほど、「森林へ休養に行く」森林体験や「山仕事をしたことがない」森林体験が多いところまでほど、森林に対する期待としての「自然保全」意識、森林体験の形態としての「ハイキ

グ・散策」意識，環境保全に対する期待としての「やすらぎ」意識，森林に関係あるものとしての「小鳥」意識のような「情感的・感性的な森林意識」が高い。

また，「森林へ仕事で行く」森林体験や「山仕事をしたことがある」森林体験が多いところでは，森林に対して具体的，かつ積極的に関わっていくという意欲が認められる。

3 森林所有と森林意識

森林所有と森林意識との関係を知るためにまとめた森林体験要因値（森林所有）と森林意識値との相関係数を示しておくのと表8のようである。

表8 森林体験（森林所有）と森林意識との関係 単位：%

	個人有林を 持っている	共同の山を 持っている	森林を 持っていない
自然保全	-0.626	-0.303	0.629
木材生産	0.494	0.254	-0.470
山菜・きのこ採り	0.690	0.457	-0.703
ハイキング・散策	-0.848	-0.626	0.864
土砂流出防止	0.521	0.527	-0.470
やすらぎ	-0.576	-0.279	0.525
小鳥	-0.639	-0.425	0.679
水の流れ	-0.095	-0.020	0.113
木の生長	0.738	0.516	-0.667
木材生産林をふやす	0.485	0.237	-0.433
観光利用を考える	0.727	0.397	-0.634

表8から次のことが知られる。

- イ) 「個人有林を持っている」森林体験と正相関を示す森林意識は，「山菜・きのこ採り」意識・「土砂流出防止」意識・「木の生長」意識・「観光利用を考える」意識であり，負相関を示す森林意識は，「自然保全」意識・「ハイキング・散策」意識・「やすらぎ」意識・「小鳥」意識である。
- ロ) 「部落有林などの共同の山を持っている」森林体験と正相関を示す森林意識は，「土砂流出防止」意識・「木の生長」意識であり，負相関を示す森林意識は，「ハイキング・散策」意識である。
- ハ) 「森林を持っていない」森林体験と正相関を示す森林意識は，「自然保全」意識・「ハイキング・散策」意識・「やすらぎ」意識・「小鳥」意識であり，負相関を示す森林意識は，「山菜・きのこ採り」意識・「木の生長」意識・「観光利用を考える」意識である。これらの結果を解析しておくのと次のようである。

「森林を持っている」森林体験が多いところでほど，「森林を持っていない」森林体験が少ないところでほど，森林休養形態としての「山菜・きのこ採り」意識，環境保全に対する期待としての「土砂流出防止」意識，森林で心ひかれるものとしての「木の生長」意識のような「具体的，伝統的な森林意識」が高い。それに対して，「森林を持っている」森林体験が少ないところでほど，「森林を持っていない」森林体験が多いところでほど，森林に対する期待としての「自然保全」意識，森林休養の形態としての「ハイキング・散策」意識，環

境保全に対する期待としての「やすらぎ」意識、森林に関係あるものとしての「小鳥」意識のような「情感的・感性的な森林意識」が高い。

次に、「森林を持っている」森林体験が多いところほど、森林の活用に関して、具体的かつ積極的に対応していこうという意向が認められる。

IV 考 察

長野県下の13市町村を対象とした調査結果を解析した本研究で、森林意識の形成にあたって森林体験が今でも大きく関与していることを明らかにすることができた。

ところで、森林環境に対する住民意識の国際比較についての研究^{7)~10)}の結果では、西ドイツのすべての調査地ではほとんど同じの共通した森林意識(「具体的・伝統的な森林意識」と考えてよい)がみられたのに対し、わが国では各調査地ごとにそれぞれ異なった森林意識がみられた。

西ドイツ国民はよく森林に出かけ、森林のなかを歩きまわっている。行きたい旅行先を「森林」としている人が60%も居り、森のなかを散歩するのが好きという人が90%を超えている。そのようなことから、西ドイツでどの調査地でも同じような森林意識がみられたのは西ドイツ国民が多く森林体験をしているからだとは一般には考えられた。そのようななかで林知己夫⁹⁾は西ドイツとわが国での「考えの筋道」の違いを指摘したが、それは西ドイツにおいて「具体的・伝統的な森林意識」が抱かれていることについて説明できるものであった。

西ドイツ国民全員が森林所有者というわけではなく、山仕事をしたことのある者も限られている。西ドイツ国民の大半が森林を休養のためだけに利用しているにもかかわらず、西ドイツ国民のほとんどが、「具体的・伝統的な森林意識」を共通して抱いていることについて、私達は林知己夫の指摘を参考にして次のように考えた。

西ドイツ国民は科学的・林学的な知識に基づいた「森林理念」を共通的に抱いており、そのような「森林理念」をもったうえで森林体験をしているので、森林意識はさらに明確なものになり、強固なものになっていると考えたのである。そして、西ドイツ国民の森林意識を、その形成の基盤に「森林理念」が存在している「理念型森林意識」であるとした。それに対して、わが国の場合、昔から森林生産や日常生活と密接に結びついて森林の利用がおこなわれていて、そのような森林体験を通して、森林についての知識や知恵や意識が蓄積されていた。それで、その森林意識はやはり「具体的・伝統的な森林意識」であった。しかし、わが国でのかつての森林意識は、「森林理念」を森林意識の形成基盤にしておらず、自然な形での森林体験だけに基づいて形成された「非理念型森林意識」であった。

西ドイツ人は理念的であるから、森林意識についても「理念型森林意識」であることはきわめて当然である。それに対して、わが国民は理念的でないから、森林意識も「非理念的森林意識」なのである。一般に、「森林理念」が明確に存しておれば、森林体験や森林意識は比較的安定しているが、「森林理念」が明確でない場合には、森林体験も恣意的であるし、森林意識も変動的になる。現在のわが国においては、

イ) 山村住民の関心が都市へと向けられるようになり、一般に森林へ行く機会が減っている

- ロ) 外材が大量に輸入されるようになって、森林での木材生産活動が減少している
 - ハ) 都市での生活環境の悪化が進むなかで、都市住民の森林での休養体験が増えてきている
 - ニ) かつては、森林での生産体験は同時に休養体験であったが、最近では、森林での生産体験と森林での休養体験とが別々におこなわれるようになり、さらに、森林での生産者と休養者とが分離している
 - ホ) 森林所有者と非所有者との分離が進んできている
- などというように森林体験のしかたに大きな変化がみられるようになって、森林体験に基づいて形成される森林意識には、明らかに大きな変化が生じた。すなわち、
- イ) 「具体的・伝統的な森林意識」がなお残っているところと、「情感的・感性的な森林意識」が強くなっているところとの分離が進んできている
 - ロ) 「具体的・伝統的な森林意識」よりも「情感的・感性的な森林意識」の方が強くなっている
- というように、森林意識は大きく変化してきている。

「具体的・伝統的な森林意識」は、生産体験や所有体験に基づいており、森林の維持・管理の基盤になるものである。それに対して、「情感的・感性的な森林意識」は、森林意識の根幹をなす重要なものであるが、非日常的・消費的な森林体験に基づいて形成されることが多いだけに、森林の直接的な維持・管理とは結びつきにくい。森林を維持・管理していくという立場からすると、「具体的・伝統的な森林意識」を少なくとも「情感的・感性的な森林意識」の程度にまで高めることと、両方の意識の一体化を図ることが望まれる。

わが国で「具体的・伝統的な森林意識」を高める方法として、西ドイツにおけるように「森林理念を社会的に明確にし、それに基づく森林体験を通して森林意識を形成するよう」にすればよいという考えも出されている。確かにそれは有効なやり方だとは思えるが、わが国の国民が西ドイツ国民と異なって理念的でないことを忘れてはならないであろう。わが国において、直接的な森林体験・森林での生産体験を増やしていくやり方についての研究がこれからは必要になると考えるのである。

参考・引用文献

- 1) 菅原聰：森林環境に対する住民意識に関する研究（Ⅰ）信大農紀要 22(1) 1985.
- 2) 菅原聰：森林環境に対する住民意識に関する研究（Ⅱ）信大農演報 22 1985.
- 3) 菅原聰：森林環境に対する住民意識「環境科学」研究報告集 B231-R40-7 1984.
- 4) 菅原聰：森林環境に対する住民意識「環境科学」研究報告集 B241-R40-3, 7, 9, 10, 11, 12 昭和59年度 環境の理念と保全手法（第1分冊）1985.
- 5) 菅原聰ほか：山村における森林環境に対する住民意識（Ⅰ）～（Ⅳ）第33回日本林学会 中部支部大会講演集 pp.51-60. 1985.
- 6) 菅原聰ほか：森林環境に対する住民意識についての研究（Ⅰ）～（Ⅲ）第32回日本林学会 中部支部大会講演集 pp.29-38. 1984.
- 7) 菅原聰・橋本久代：自然観の国際比較に関する研究（Ⅸ）第94回日本林学会大会発表論文集 pp.97.98 1983.

- 8) 四手井綱英・林知己夫・菅原聰ほか：森林をみる心 共立出版 1984.
- 9) 四手井綱英・石田正次・北村昌美・菅原聰ほか：自然観の国際比較に関する研究 (I)~(VII) 第93回日本林学会大会発表論文集 pp.59-74 1982.
- 10) 四手井綱英・石田正次・北村昌美・菅原聰ほか：森林環境に対する住民意識の国際比較に関する研究 トヨタ財団助成研究報告書 1981.

Consciousness of Regional Residents for Forest Environment (III)
—Forest Experience and Forest Consciousness—

By Satoshi SUGAHARA

Institute of Forest Management Fac. Agric., Shinshu Univ.

Summary

The aim of this study was to make clear the mutual relation between the forest experience and the forest consciousness of the regional residents.

The survey of the forest consciousness and the forest experience were carried out by mailed questionnaire. The mailed questionnaire was directed to sample taken from the whole population of all survey regions. The survey regions are the following 13 regions: Nagano-shi, Matsumoto-shi, Suwa-shi, Ina-shi, Tobu-cho, Karuizawa-cho, Agematsu-cho, Hakuba-mura, Nozawaonsen-mura, Kawakami-mura, Sakae-mura, Tenryu-mura and Nagawa-mura.

Through the study in Nagano prefecture, we found that the consciousness of regional residents for forest environment consists of the regional consciousness, which are heterogeneous in each survey region, and the common consciousness, which are homogeneous throughout all survey regions. And we found that the regional consciousness are “wood production” and “conservation of nature” as the expectation for forest, “mushroom gathering” and “hiking” as forms of recreation in forest, “erosion controll” and “free from anxiety” as the expectation for conservation of living environment, “small birds” as the forest image, “water stream” and “growth of trees” as the forest fascination, “increasing of forest for wood production” and “using of forest for tourism” for forest in future. We pointed out that the forest consciousness is divided into two kinds: the concrete and traditional forest consciousness and the sentimental and sensible forest consciousness. The former implies the consciousness of “wood production”, “mushroom gathering”, “erosion controll”, “growth of trees” and “increasing of forest for wood production”. The latter implies the consciousness of “conservation of nature”, “hiking”, “free from anxiety”, “small birds” and “water stream”.

We picked up following forest experience in this study.

- 1) As the quantity of forest experience: “rarely going to forest”, “sometimes going to forest” and “frequently going to forest”.

- 2) As the quality of forest experience: "going to forest for work", "going to forest for recreation", "having experienced deforestation or afforestation", "having experienced weeding or pruning" and "not having experienced silvicultural works".
- 3) As the possession of forest: "having private forest" and "not having forest".

From the analysis of consciousness of regional residents for forest environment, we can point out as follows:

As for the relation between forest experience and forest consciousness, the concrete and traditional forest consciousness is influential where many people "go to forest for work", "have experienced silvicultural works" and "have private forest". On the other hand, the sentimental and sensible forest consciousness is influential where many people "go to forest for recreation", "haven't experienced silvicultural works" and "don't have forest".